

『Dance with the invisibles』 秀歌抄出三十首

* 選考委員による抄出

灯油売りの車のこゑは薄れゆく花の芽しづむ夕暮れ時を

春の二階のダンスホールに集ひきて風をもてあますレズビアンたち

手を振りて駅に別れば明日にはまた透明の女に戻るわれらか

あかねさす銀杏並木のはつ冬の黄葉くわうそふするつてきもちがよささう

けはひなく降る春の雨 寂しみて神は地球に鯨を飼へり

われにある二十の鱗すなはち爪やはらかに研ぎゐるゆふべ

木のスプーン銀のスプーンぬぐひをへ四月の午後は裸足でねむる

悲傷なきこの水曜のお終ひにクレジットカードで買ふ魚うをと薔薇

春の夜によそふシチューのごろごろとこどもの顔沈みあるごとく

婚なさず子なさずをれば一日がシロツメクサのやうな涼しさ

告解の少年少女を思はずも雪平鍋に口ひらく貝

そこらぢゆう木香薔薇が咲いてゐる 夜なのに子どもの声がしてゐる

人らみな羊齒の葉ならばをみなともをのこともなくただ憂ふのみ

十七月の夜のカタン 娘はいまゆめみるごとく領地拡げて

三十歳になるのは この世にひとりぼっちみたいな表情をやめたこと

猫といふさすらふ湖^{うみ}がけさはわが枕辺に来て沿ひてひろがる

強盗が来るやうな気がしてゐる夜に母の肩にかけるカーディガン

秋なれば光澄みつつある昼を妹の婚告げられてゐつ

とまり木にとりどりの鳥、鳥は鳥の骨格通り羽を広げる

塩買ひに出づれば月は溶けかけてその月からもとほいわたしだ

後ろ手に門鎖されてふりむけばワルシヤワはとても白い街だった

春の日をこもりてをれば机がだんだんやはらかくなりて卵も割れぬ

数式を食事のやうに与へたりわれは機械に物教へむと

手を出せば手に乗つてきて雨のなか　ああわたしたち帰る巣がないのだ

木犀は夜に匂へり寝室へもどれなくなつた子どものやうに

秋の薬局までの坂道のぼりながらさういへばずつとない現実感

致死量の水仙の花が咲いてゐた最後の家族旅行の記憶に

女が政治の話などするなとわれに怒鳴りし人かつてあり　石の食卓

口紅といふ制度さびれて三度目の春の一千枚目のマスク

香水をたがひに交換して秋の夜を抱く　耳の後ろがひかる